

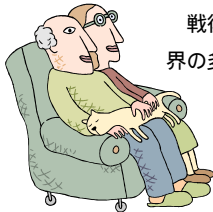
老賢者は語る

永田 円了

New Life with Unlearned Wisdom

「人は組織からの卒業や引退はありえても、自分自身から引退することはできない(前ソニーCEO 出井伸之氏のコトバ)」。本当にその通りである。かくいう筆者(永田円了)も還暦を迎えた。組織からは、もう何年も前に引退した。子どもたちも手がかからなくなった。さあ、これからどうする、老いに身をまかせて、ひょうひょうと生きるか、まあ、それもいい。でも、何かあるだろう。人生の折り返し地点を過ぎたからこそできることが、このときこそ、自らの中に潜む老賢者のコトバに耳を澄ませる必要があるのでは、と思う。

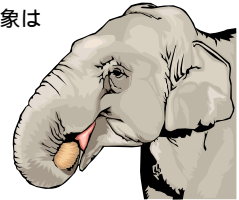
高齢化する世界



戦後世界の平均寿命は 25 年も伸びた。世界中で今高齢者が若者の数を上回ろうとしている。2050 年までには、世界の多くの国で、60 歳以上の人口が全体の 1/3 以上を占めるようになると予測されている。そして、その時までには社会を変える必要があると専門家はいう(NHK BS「高齢化する世界」5/9/2009) このように、メディアは口をそろえて、高齢化社会に対応するためには社会制度を変えよ、と報道する。制度を変えれば、人間も変わるというのだろうか。私はそうは思わない。変えるべきは、人間一人ひとりの意識のはずである。

老象の知恵

人間というものは、自分が存在することで周囲の誰かに“役立っている”という感覚なしに正気を保つことは、ほとんど困難な動物であるという。普通生き物は、繁殖を終えたと死んでいく。しかし人間は例外的に、他の動物と比べて長命な生き物だという。例外としては、象やイルカは繁殖期を終えた後も、人間のように長命である(霊長類研究家・正高信男)。では、人間以外の、例えば、象は高齢化の問題をどう乗り越えているのであろうか。



ここに、スリランカで起こった面白い事例がある。数年前のインド洋で起こった大津波、多くの人命が失われたが、スリランカの象は一頭も死ななかつたという。何故だったのか。津波が押し寄せてくる前に、低い周波数の音がするという。人間には聞こえないこの音波を、象が察知していたのであった。象といっても、普通は下位にいる年老いた老象であった。若い象には、この音が聞こえても、津波と結びつけることはできなかった。しかし老象は長い過去の経験からこの危険をいち早く察知し、象の群れを山の上に非難させたのであった。長い人生を経験したからこそ、いざというときに“役に立つ”知恵がある。

自分の中の老賢者



老賢者とは心理学者ユングのコトバである。老いることによって、より賢くなっていく。それは、皆より数学ができるとか、良い点がとれるとか、という学校賢者ではなく、生きることにより賢くなるということである。人間の肉体は、どうしても老いていくもの。巷では、年をとっても元気でいる方法とか、この薬を飲めば若さを保てるなどと、肉体の老いばかりを気にかけている。

本当の問題は、我々の心の中の老賢者は、どれだけ育ってきたか、が大事であろう。老賢者とは、周囲から学んだ知識・知恵を、いったん自分の頭から降ろし、もう一度組み替え(Unlearn)、体験に基づいた自分自身の知恵として活用できる人のことである。

I say it's fun to be 20
You say it's great to be 30
And they say it's lovely to be 40
But I feel it's nice to be 50

I say it's fine to be 60
You say it's alright to be 70
And they say still good to be 80
But I'll maybe live over 80

I say it's sad to get weak
You say it's hard to get older
And they say that life has no meaning
But I still believe it's worth living

人生の扉

竹内まりや、人生を謳う

20代は刺激に満ちあふれ、30代は一つのことを深め、
40代は、ちょっと肩の力を抜き、50代は、かっこよく、
60代は、粋な生き方を、70代は、いたわりながら、
80代は、まだまだかっこよく、そんな生き方ができればいいな、
だって、人生舞台にはそれだけの価値があるもの。

永田円了訳

